26 寿老人鶴亀図　橋本雅邦　三幅対

明治期（十九世紀末～二十世紀初頭）
絹本着色
本紙各一二四・五×五〇・八

鹿を連れた寿老人を中央に置いて、右には若松に鶴、左には笹の生えた岩にのぼる親子亀を描いた三幅対であり、長寿の象徴で構成された吉祥画といえる。三幅とも主要モチーフ以外はあまり描き込みをせず余白を多く残して、あっさりとした画面に仕上げている。寿老人の傍らにいる鹿は、幽谷の描く白鹿（No.25）とは異なる体毛の黒い玄鹿である。一説には、鹿は千年で蒼鹿、千五百年で白鹿、二千年で玄鹿になるという。また左幅の岩に生えている霊芝は、サルノコシカケ科マンネンタケのことであり、古来より食べれば長寿を保つ瑞草とされ吉祥画題としてもしばしば描かれてきた。

橋本雅邦（一八三五～一九〇八）は、フェノロサ、岡倉天心のもとで日本画の革新につとめ、東京美術学校、後に日本美術院で横山大観や下村観山といった近代日本画壇の大家となる画家らを育成した。寿老図と言えば、代表的なものに雪舟の「梅花寿老図」（東京国立博物館蔵）があり、この図を祖型とした寿老図が数多く描かれてきた。雅邦の盟友狩野芳崖もこの雪舟の寿老図を模写し、またアレンジしたものを数点遺している。しかし本図はそうした寿老図とも一線を画している。雅邦は寿老人の顔をいたって写実的に描き、現実感をともなった生身の人間の顔にしている。また寿老人の背後の梅樹や鶴の背後の松は薄くぼかされ、その空間が画面全体の画趣を高めている。このように伝統的な画題に光や立体感などの新しい感覚を取り入れる試みを雅邦は終始行っていた。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

福やござれ —寿ぎの美・新春に集う
三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 42

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年一月六日発行

© 2007, The Museum of the Imperial Collections